

2020・21年の年末年始における牛・豚肉の価格・販売動向

2021年2月26日

(公財)日本食肉流通センターでは、年に3回程度、特定時期の牛・豚肉の価格・販売動向について、当センター公表の部分肉価格(月報値)を活用して、情報提供しています。

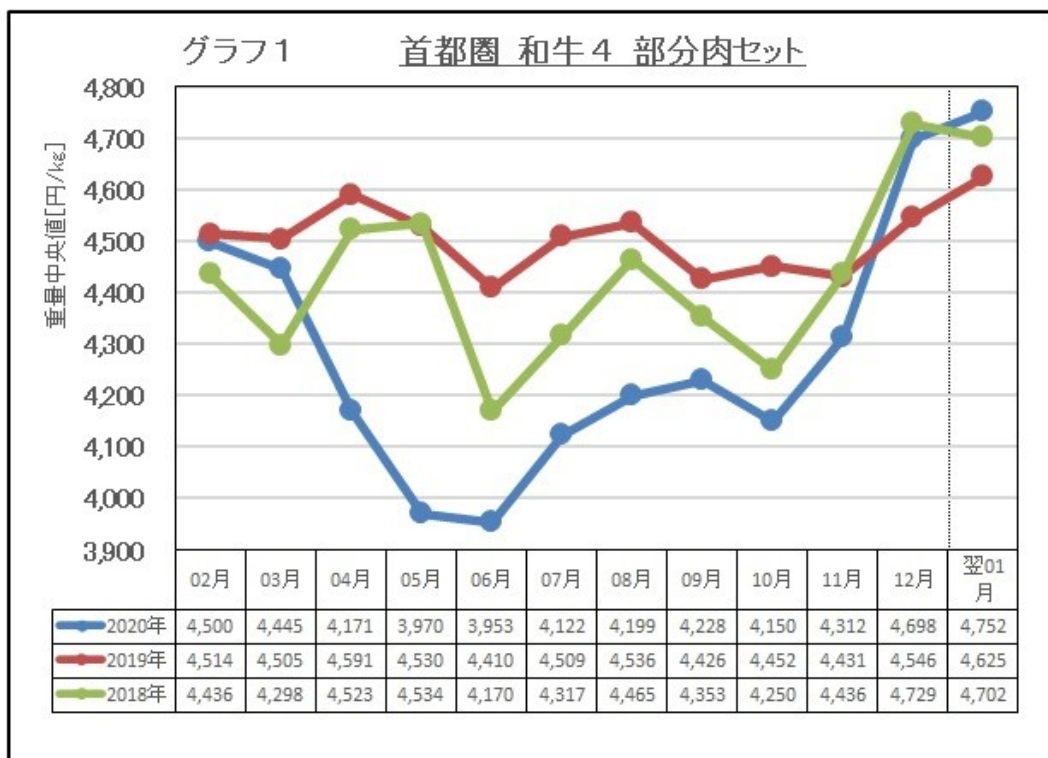
今回の報告は、2020・21年の年末・年始の期間について、2018年2月から2021年1月まで3年間の和牛4等級及び豚肉I規格に係る部分肉価格動向のグラフとセンター内出店者の聴き取り調査を基に、作成しています。

なお、2020年2月から10月までの価格動向につきましては、当センターホームページで公開している「新型コロナウイルス感染症関連での食肉業界の状況等」(令和2年12月28日)をご参照ください。

1 和牛部分肉

ア 価格動向について

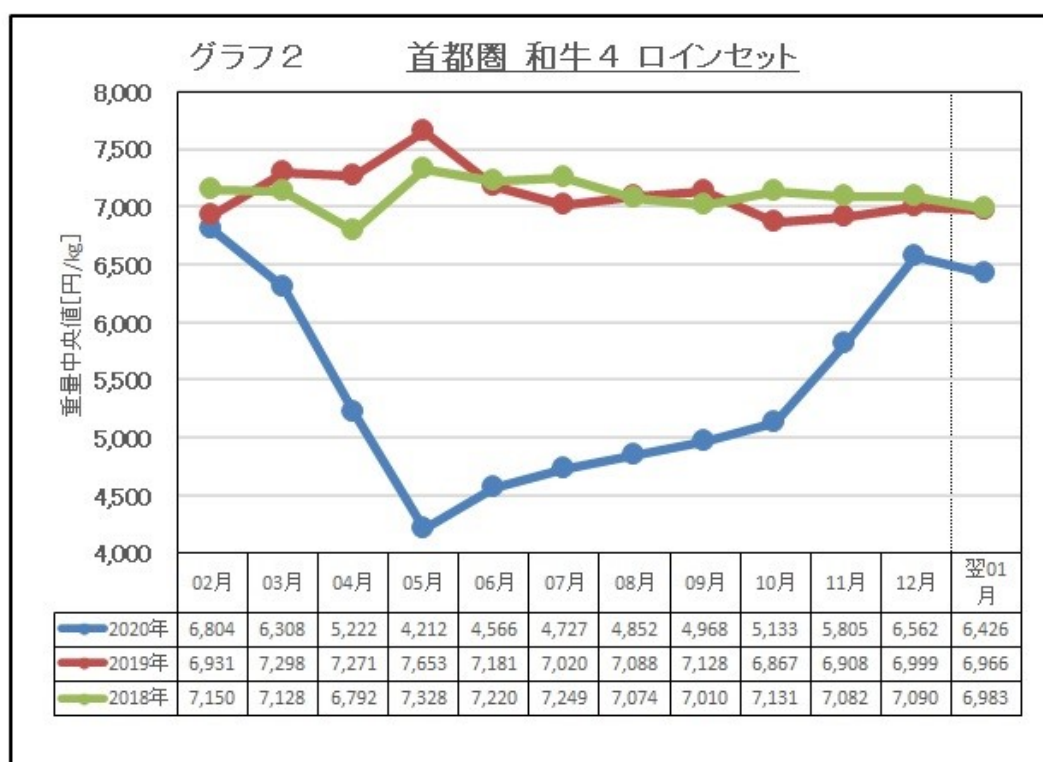
部分肉セット価格(グラフ1 参照)



和牛肉について、生産量が増加傾向にあったこと並びに格付上位等級である5等級及び4等級の割合が上昇傾向にあった背景の下、和牛「4」部分肉セット価格は、2019年11月以降、前年を下回った推移をしています。

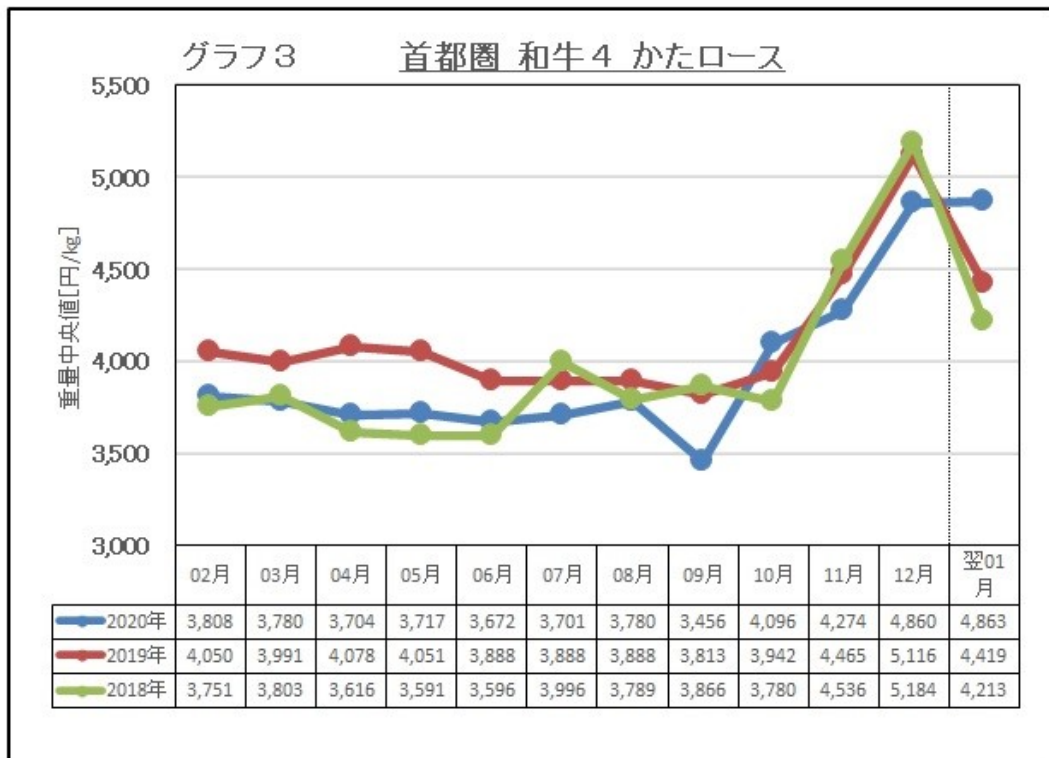
さらに、2020年にはコロナ禍の中、インバウンド及び消費者の外出機会が著しく減少した等の理由により、部分肉セット価格は大きく下落しましたが、2020年6月を底として、上昇傾向となり、2020年12月及び2021年1月には前年の価格を超えるまでになっています。

部位別：和牛 ロインセット価格（グラフ2 参照）



部分肉セット価格より高額で、高級部位のひとつであるロインセット価格では、価格の下落率が部分肉セット価格より大きく、年末年始を超えてもまだ価格が前年を下回って推移しています。

部位別：和牛 かたロース価格（グラフ3 参照）

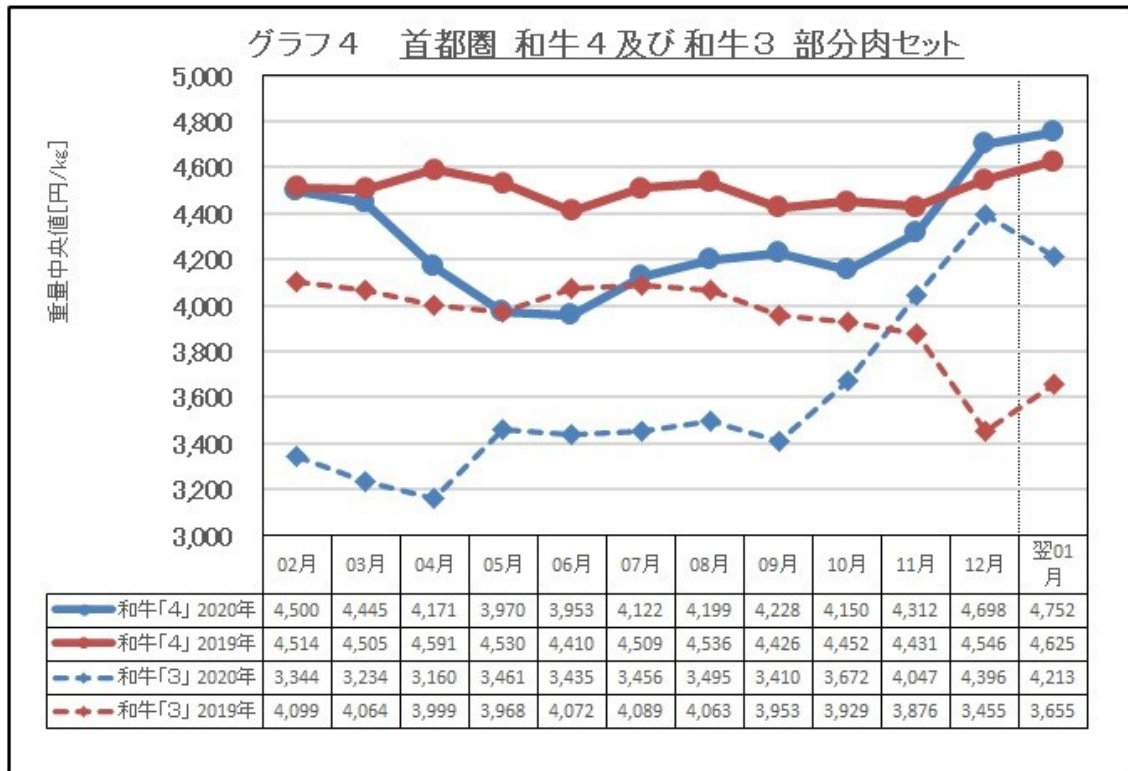


かたロース価格は、部分肉セット価格より下落率が小さく推移してきましたが、2020年10月及び2021年1月は前年を超えて推移しています。

また、当センターは、かたロース価格が例年12月に急上昇することを公表しており(注1)、2020年12月も、部分肉価格セット価格を超えて急上昇しました。年始の1月には下落する例年とは異なり、1月になっても価格を維持して推移しています。

コロナ禍は、高価格部位の価格への影響が大きく、その影響は年始も継続しています。

肉質等級別：和牛の4等級及び3等級（グラフ4 参照）



コロナ禍の価格への影響を和牛の肉質等級別にみると、部位別にみるとは異なり、下位等級で価格の安い3等級の方が4等級より価格への影響が大きく、部分肉セットの価格の下落が4等級より早く始まりました。

その一方、価格の回復も早く始まり、価格が昨年を超えるのも4等級よりも早期でしたし、昨年同期比の価格の下落や上昇の比率も3等級の方が大きくなっています。

なお、和牛における部分肉セット価格は、肉の熟成期間等もあって、通常、枝肉価格より1月遅れて連動する相関が高い(注2)傾向があり、2020年以降も同様の傾向をみせています。

- (注1) 枝肉価格と部分肉価格の相関及び部位別価格の季節性等の分析
2020年12月公表 キ 和牛かたロースの12ヶ月周期の季節変動
- (注2) 同上 イ 首都圏と近畿圏での枝肉価格とセット価格の相関関係

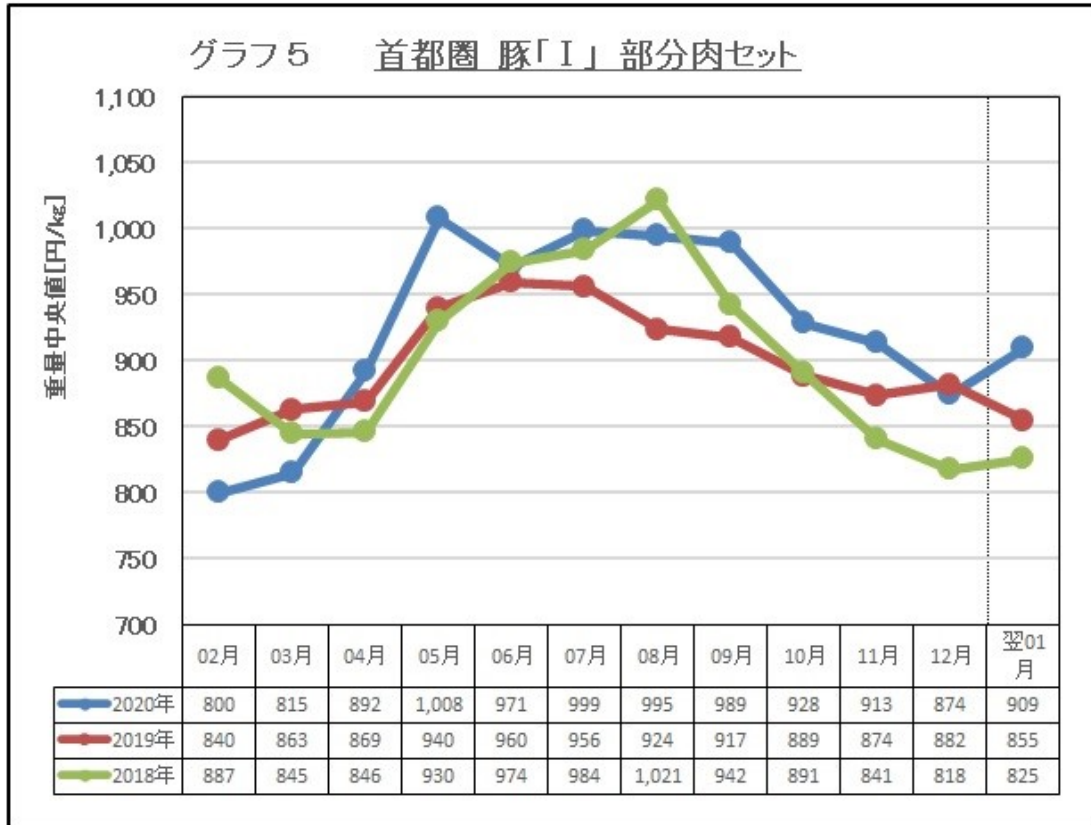
イ 年末年始の販売動向について

- 農水省のコロナ対策などの政策の効果もあって、昨年秋以降、外食への和牛肉の販売が回復しつつありましたが、年末の GOTO キャンペーン停止や1月8日の緊急事態宣言の再発令により、外食産業への販売が再び落ち込み、年始は年末より厳しい状況になりました。
- 年末は、和牛肉での切り落とし商材である低価格部位がよく売れました。
また、補助事業を活用した和牛肉の販売（具体的には、年末の小売での特売イベントや学校給食への提供）に協力した企業もいました。
しかし、ヒレやロインなどの高価格部位の販売は、低価格部位ほどには回復しませんでした。
- 和牛の枝肉価格が昨年秋以降に仕入価格で想定していた以上に上昇したため、販売価格に転嫁ができないことがあったため、年末年始の卸としての和牛肉の利益率は低下しました。
- 量販店などの小売向け販売は順調でしたが、ホテルや外食産業等への業務向け販売については不振が続いています。
和牛肉の業務向け販売に対する不振を補うため、昨年から取り組んでいるふるさと納税、ネット販売や輸出などを引き続き活用した企業が複数社ありました。

2 豚部分肉

ア 価格動向について

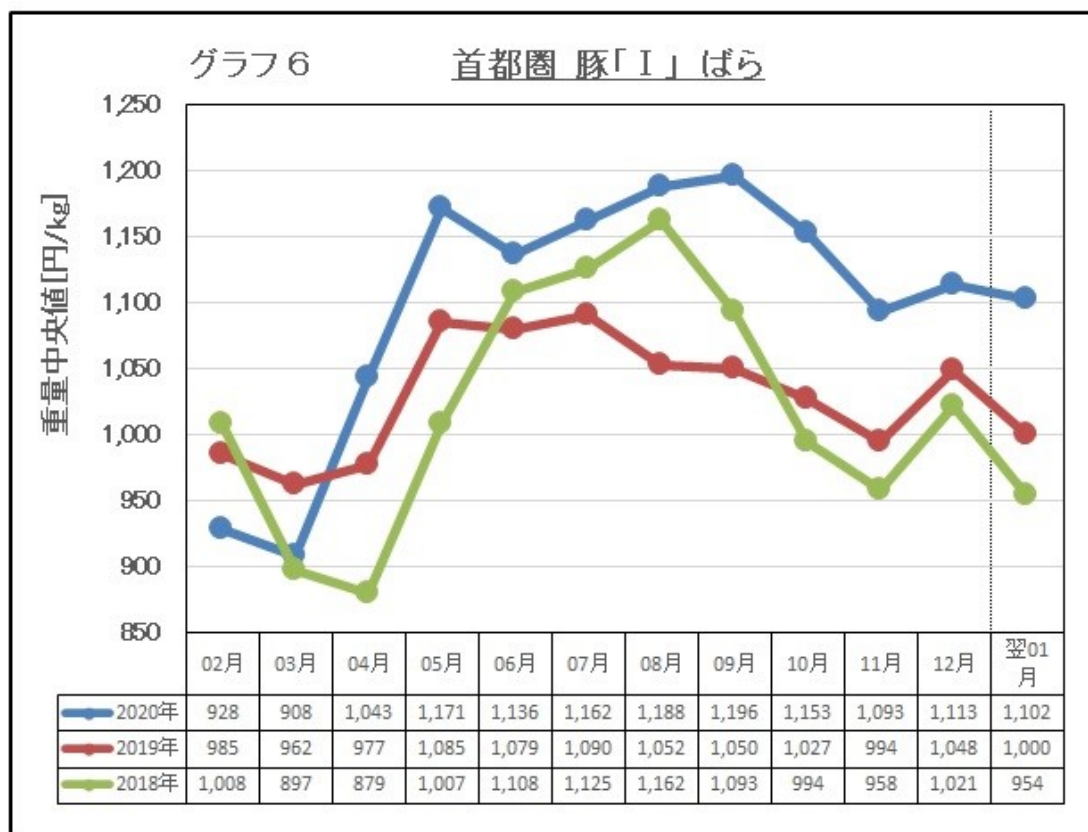
部分肉セット価格（グラフ5参照）



国産の豚「I」規格（枝肉では格付「上」規格以上）部分肉セット価格は、2020年では、2・3月は前年を下回っていました。

しかしながら、4月以降は、和牛肉と異なり、前年を上回って推移し、12月は一時的に前年を下回ったものの、2021年1月には、前年（2020年）を超えています。

部位別：豚 ばら価格（グラフ6 参照）



ばら価格は昨年4月以降2021年1月まで前年を上回って推移しており、価格上昇率は部分肉セット価格を超えています。

また、当センターが保管している2010年以降の年次ベースのデータでは最も高くなっており、年末年始に限定すれば、ロースやかたロースを上回り、全部位の中で最も高くなっています。

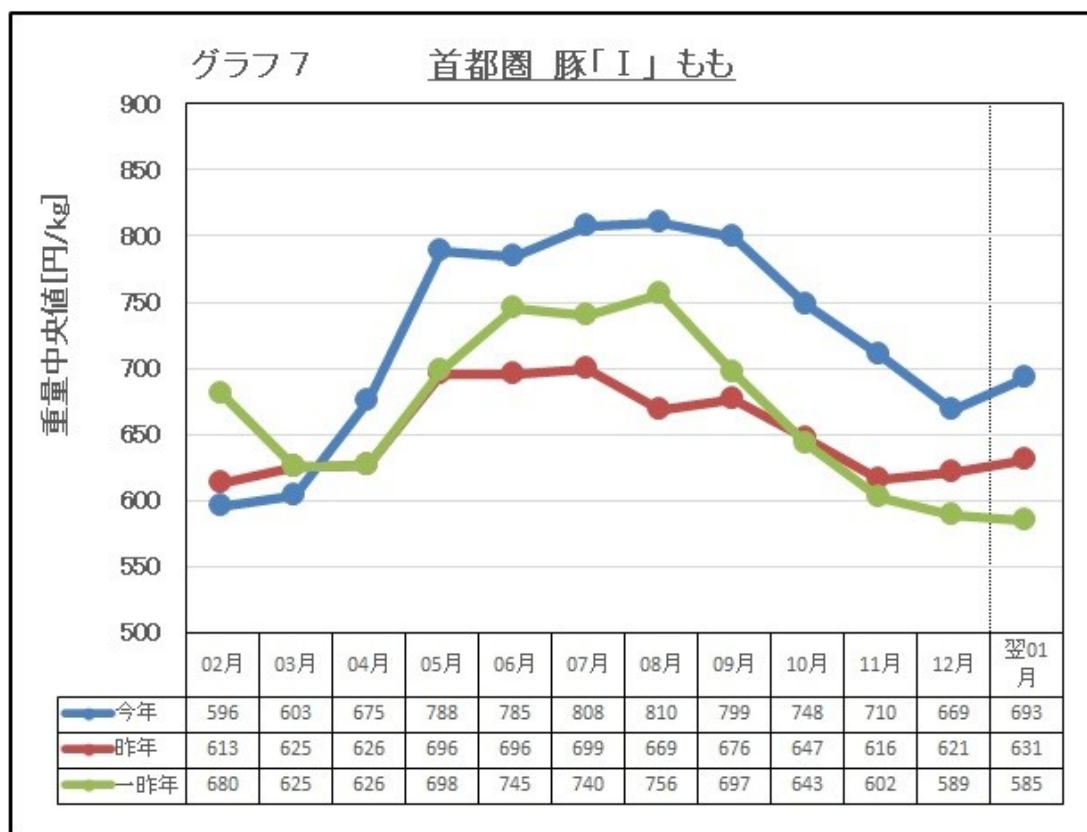
コロナ禍においても、当センターが公表した(注3)、ばら価格の部分肉セット価格に対する比率(比価)が上昇、この傾向が継続しています。

グラフ化していませんが、かたロースやロースの価格も、ばらほどではありませんが、上昇しています。当センターのホームページにアクセスいただければ、各部位の3年間の価格推移を確認することができます。

直近では、かつては最も高かったヒレ価格が、ばらやロース、かたロースの価格をも下回っています。

(注3) 枝肉価格と部分肉価格の相関及び部位別価格の季節性等の分析
オ 首都圏での豚セットに対する主要な部位肉の比価の推移

部位別：豚 もも価格（グラフ7参照）



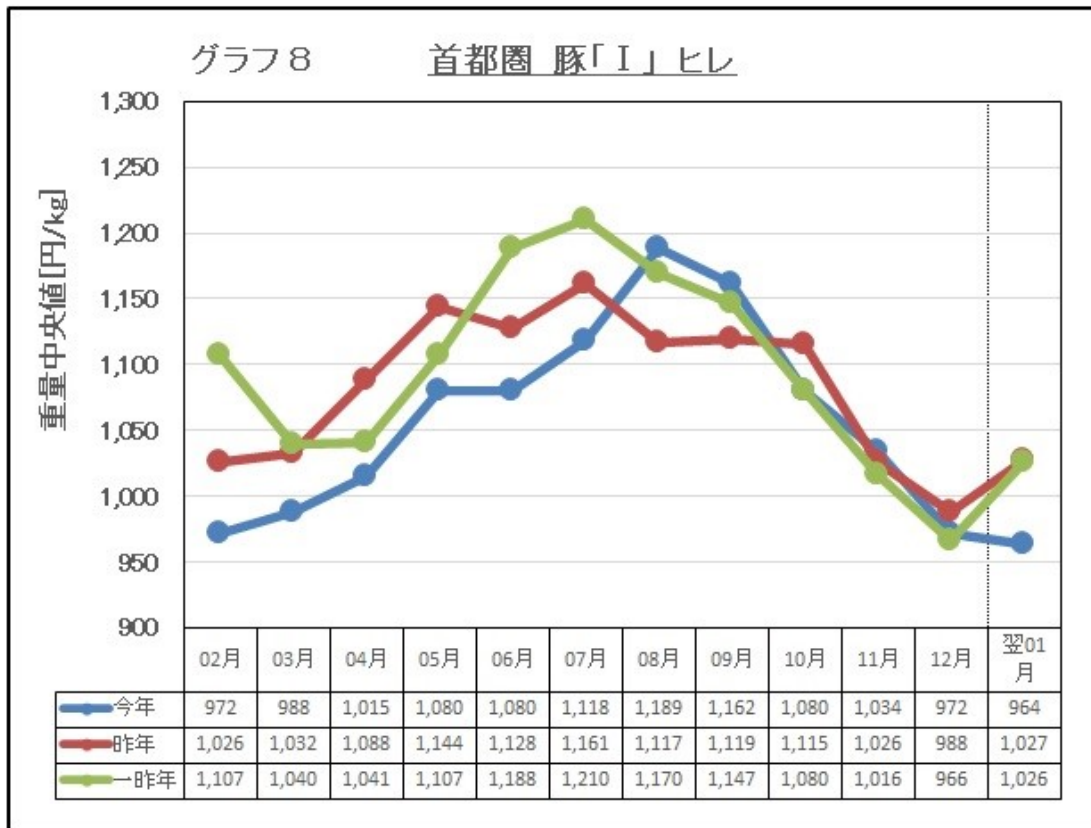
もも価格も、2020年4月以降2021年1月まで、前年を上回って推移しています。

さらに、年始の1月には、12月からやや下落したばらやヒレとは異なり、12月の価格を上回っています。

もも価格は部分肉セット価格より低いものの、価格上昇率は部分肉価格セット価格より高くなっています。

部分肉セット価格の高値が継続してきた中で、各部位に価格上昇率を一律に転嫁するのではなく、部分肉セット価格より安い部位への転嫁が進んでいるためと考えます。

部位別：豚 ヒレ価格（グラフ8参照）



ヒレ価格は、2020年7月まで前年を下回り、8・9月に一時的に前年を超えたものの、10月以降1月まで、前年を下回って推移しています。

部分肉セット価格の高値が継続してきた中、部分肉セット価格より高い部位の中で、ばら及びかたロースの評価が上昇し、ヒレの評価が下がってきていると考えます。

イ 年末年始の販売動向について

- ・ コロナ禍により、食肉に対する需要が、外食から中食・内食へ移行する中で、和牛肉価格が低下する一方、国産豚肉価格は上昇してきました。
小売向け販売割合（家庭内消費）が和牛肉と国産豚肉とも7割弱であるのに対して、外食への販売割合が、和牛肉が25%と多く、国産豚肉が10%と少ない(注4)ためと考えます。
- ・ 年末年始の販売において、和牛肉と同様に、国産豚肉も小売向けが好調で、部位としては、ばらやロース、かたロースが、特に好調であると複数の企業がコメントしました。
その中で、ばら価格のこれまでの比価を見直し、今後は、引き上げて販売したいとする企業がありました。
- ・ アフリカ豚熱の中国での流行やドイツでの発生により、豚肉の世界的な貿易が大きく変動する中で、短期的には輸入チルド豚肉で国内の豚肉需要に十分な対応ができないが、長期的には、国産豚肉の高値を輸入チルド豚肉が沈静化させることを期待する企業がありました。

(注4) 公益財団法人日本食肉流通センター

「食肉流通実態調査 事業報告書 II (令和2年6月発行)」

VI 牛肉・豚肉の需要量推計(平成30年度)